

125

特 252

415

書叢トッレフンバ新革本日

輯 壹 第

古典觀

久留弘三著

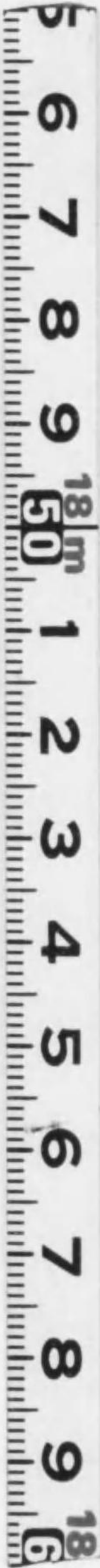
古典より觀たる
日本精神

所 行 發

黨 新 革 本 日

38

3



始



特252
415

明治維新

勤皇歌人

すたれつる古典ども、動き出で、

御代あらためつ時のゆければ

序文

私がかねてから「古典を讀まずしては、斷じて日本精神は把握出來ない」といふ信條をもつてゐる。この信念をもつて、古典を通して觀たる日本精神の眞隨を書いたのが本書である。
たゞ研究未熟にして、その資格に於いて缺くるものあるを耻づるのであるが、幸ひにこの小著をなし得たのは、一に多くの先覺、先輩の勞作の賜である。銘記して深謝の意を表す。
時恰かも暴支膺懲の聖戰、正に酣なるのとき、この小冊子を世に送ることにより、筆者の銃後に於ける奉公の一端ともなれば、望外の幸ひである。
尙、讀者諸彦は、これを機縁として進んで古事記、日本書紀等古典に親しまれむことを切望する。

皇紀二千五百九十八年豊秋

久留弘三



目次

一、神道……………(一)

二、古典……………(二)

三、古典の由來……………(四)

四、古典を如何に見るべき乎……………(八)

五、古典は一大政治經典なり……………(二)

六、古典の内容……………(四)

七、結語——言靈について……………(三)

(イ)生成思想について……………(口)天皇の御本質……

(ハ)「日本は神國なり」といふ意味……………(ニ)大和民族の世界史的使命……………

古典觀

——古典より觀たる日本精神——

久留弘三

一、神道

日本精神は神道から發足してゐる。そこで、日本精神を體得するには、一應神道を研究する必要がある。神道を研究して驚くことはその若さ、廣さ、深さである。

神道といへば、如何にも古色蒼然たる神が、りのりなもの、或は現代には、何等生命カを持つてゐないものゝ様に解してゐる人が、かなり多いやうだが、それは大きな謬見である。なるほど、神道の歴史は古い。しかし、そこには、いつも汲めどもつきぬ清冽なる清水が滾々として

湧いてゐる。永遠に純なる處女性がかくされてゐる。常にフレツシュな若さが躍動してゐる。次に神道は宗教ではない。宗教には、すべて教祖があるが、神道には教祖がない。従つて神道には儒教に於ける五經もなければ、佛敎に於ける經論も、基督教に於けるバイブルもない。神道は「神ながらの道」ともいはれる。これは神代さながらの自然の道といふことである。即ち、無始より無終にいたる、一貫して變ることなき宇宙大自然の法則が示されてゐるのである。而して、この宇宙の事實こそは、勅語に宣明せられたる「古今に通じて謬らず、中外に施して悖らざる」萬古不變の眞理である。それ故に、神道は、宗教、道德、哲學等が包含し得ないものまでをも含んでゐるのである。

一、古典

神道には教祖なく、經典がないとすれば、一體、何を典據としてゐるかといふと、それは古典である。即ち、古典に存する宇宙全體の眞理を研究、體得、大觀、直觀することによつて、神

道を知り、日本精神を把握することが出来るのである。

古典とは何かといふと、古事記、日本書紀、古語拾遺、姓氏錄等々何れも古典ではあるが、こゝでいふ古典とは、普通、學者の間で、紀記の略稱で呼ばれてゐる日本書紀、古事記を指していふのである。

ところが、最初、これ等紀記の神代巻を讀むと、或は神話とも、寓話とも、譬喩談とも見られ得る事柄が、次から次へと現はれて來るので、始めて讀む人はその解釋にハタと當惑するのであるが、繰返して讀んで行くと、次第にその意味を捕捉することが出来るものである。この點について森昌胤が「神道を知るには、神代記を素讀する外なく、讀書百遍意自から通ず」と云つてゐるが、全く同感である。

話は違ふがさき頃、ある新聞に愉快なことが報道せられてゐた。それは革新日本を知るにはその根源をなす古事記、日本書紀等の古典を研究する必要があるといふ意向が、最近英國の知識階級の間に熱心に主張せられて來たので、外務省文化事業部では、これ等の古典を英譯して送ることにしたといふニュースである。

明治維新の志士たちの指導精神となつたのも古典であるといふことを聞いてゐるが、今日、昭和維新を叫ぶ人の中に、若し古典を讀まざる人があれば、それは大へん遺憾なことである。私はそれ等の人は勿論、凡ての日本人が古典を必讀することの要を痛切に感ずるものである。黑板博士が「日本書紀精粹」に「日本書紀は過去の日本を教へると同時に、日本の進むべき道を具現し、國民を指導して行くものである。換言すれば、日本は、その時々々の社會情勢を緯とするならば、あくまでこの日本書紀に示された大精神を經として、大和民族の發展と言ふ一大織物を織り出す様に心懸けねばならぬ。故にこの書は決して一部の學者の間にのみ讀まれ、研究されるべきものではない。寧ろ國民として家々に一本備へねばならぬものである云々」と云はれてゐるが至言である。

三、古典の由來

次にこの千古不磨の古典はどうして出來たかといふことについて述べやう。

文字の無かつた神代時代に於いては、口から口へ、語り傳へ、聞き傳へられたものが、歴史として修録せられたものであるが、我が國に於いて、はじめて修史といふことが文献に見えたのは推古天皇の二十八年である。それは今日から千三百餘年も前のことであるが、聖德太子が天皇記、國記等數種の本記を撰録し給ふたのである。ところが、これ等の國史は惜しいことは皇極天皇の四年、あの有名な、大化改新の際、蘇我氏の滅亡と共に焼失して仕舞つたのである。そこで、さきに云つた紀記が最古の記録といふことになるのだが、然らばこれ等兩典は如何にしてつくられたか。

元來、我が國は言靈の幸はふ國と云つて、言靈（眞實の言葉）によつて古くから語り傳へによる種々の記録があつたが、時を經るに従つて、その事實には種々誤謬の點があつた。天武天皇は、これを遺憾に思召され、これを改定し、正しきを後世に傳へやうとの御志から、稗田阿禮なる者に勅して、歴代天皇の御紀、及び古來の言ひ傳へを誦み習はしめ給ふたのである。間もなく天皇は崩御となり、この事業は一時中絶したが、その後二十餘年元明天皇は、和銅四年太安萬侶に詔して、稗田阿禮の口授したるものを撰録せしめ、かくしてその翌年正月をもつて

出来上つたのが古事記三卷である。それは今から實に一千二百餘年前のことである。

さらに、その頃朝廷は天武天皇の皇子、舍人親王を總裁に任じ、天皇の御遺志を奉じ、古事記の筆録者である太安萬侶に命じて國史編修の任にあたらせ給ふた。かくて元正天皇の養老四年五月、こゝに三十一卷から成る老成なる日本書紀は出来上つたのである。古事記が出来てから、僅かに九年目のことである。

右様の次第で、神典とも申すべき古事記、日本書紀の二典は出来上つたのである。さて、この二典は共に我が國古代の神事、歴史を書いたものではあるが、これを併讀して見ると、一つは丁度、古老の昔物語を目のあたり聞くやうな心地がするのに反して、一つは正式に史官の記した記録を読むやうな感じがする。

文體も一は國語體であり、一は漢文體によつて居る。そこで、これに對して種々の臆説があつて例へば、當時、何ごとも支那の文化を理想としてゐた要路の人々は日本風な古事記では満足が出来ず更に支那風の編修法を眞似た堂々たる國史の編纂を企圖して出来たのが日本書紀だともいはれてゐる。そこで加茂真淵や、本居宣長等の如き國學者は、日本書紀は文飾多く、事

實を誤つてゐるところが多く、それに全卷を通じて、漢籍意（支那思想といふ意味）があつていけないと排斥してゐる。

然し、その編纂法の如きは、まことに慎重をきわめ、同一事實に異説があつたり、或は本文にないものは一々「一書に曰く」といふ風に採録して、つとめて異説別傳を網羅してゐる點など、實に用意の周到なるものがあり、殊に我が國體の淵源を明徴にしてゐる點に於いて不滅の神典たるを失はない。

即ち、「天祖の神勅」として、或は「天壤無窮の神勅」として、日本が神國たる所以を明らかにせられてゐる重大なる詔勅が、古事記は勿論、書紀の本文にも逸して傳へられてゐないのを、「一書に曰く」の中に保有せられてゐるが如きはその一例である。そこで、書記集解の著者である河村秀根の如きは「書紀に深ければ國體に達す」と論斷してゐるのである。

それはさておき、私は記紀兩典が相前後して編纂せられたのは、その書名や、文體の相違から見ても、古事記は主として我が國民に健實なる國家觀念と國民思想を吹きこむために撰修せられたものであり、日本書紀は對外的、即ち主として支那人に我が國體の尊嚴と理想とを知悉

せしむるために撰録せしめられたものと見るのが妥當ではないかと考へる。又、當時に於いて支那人へといふことは全世界人へといふ意味を含んでゐたことを考へるとき、私共は今更らなから上古日本人の氣宇の雄大なるに敬服させられるのである。

四、古典を如何に見るべき乎

古典としての古事記及び日本書記の神代卷を、從來どういふ風に見て來たかといふと、それには異つた二つの研究態度があつた。

(一) は神代卷の全記述を、そのまゝ事實性と認めて、これに就いて歴史的、地理的證明を與へやうとするもの、及び

(二) は記述の事實性を認めず、説話性として見るもの

この二つである。即ち、全部を歴史的事實と観るか、或は事實性のない説話群として見るかの、何れかである。が、私をもつて云はしむれば、その何れに偏することもあやまりである。

このことに就いては、後程、詳説するが、面白いことには、これ等神代卷の叙述を今日の發達した自然科学に照合して見ても、そこに、少しの矛盾もないといふことである。即ち、古典には多くの神々の名前が出て來るが、それは、天地出現の順序を、神の御名をもつて言ひ顯はしてゐるのである。しかも、この様に天地創造の不思議なる現象を、神の意志の發展と解して、それ々の現象の中に、神そのものを表現せしめこれを直ちに神と呼ぶことは、頗る意義深く考へられるのである。而して、かういつた觀方で古典を讀むと、天地生成の順序が極めて明瞭に且つ正確に描き出されてゐるのである。

即ち古事記のはじめに

天地初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神……。

とあるが、この場合の高天原を大宇宙と解すると、天之御中主神といふのは、時間、空間を超越したる宇宙の大根元、大中心を神格化したものと解せられ、次に森羅萬象生成の原動力である發顯及び還元的作用(これを陰陽とも、物理學でいふ電子とプロトンといつてもよからう)は、これを高皇產靈神、神皇產靈神といふ御名によつて表現せられてゐるものと解することが

出来るのである。次に諸原子を造營し給ふ神として、宇麻志阿斯詞比古遲の神が現はれ給ひ、その後にはじめて太陽系宇宙の中心である太陽、即ち天之常立神が出現せられて居るのである。この五神を別天ツ神と申上げてゐるが、日本書紀にしても、基督教の創生記にしても、地球の生成から、その記述が始まつてゐるに拘らず、ひとり古事記のみが、さかのぼつて大宇宙の生成より説き起されてゐるところに、古事記が、比類なき神典たることが示されてゐるのである。幕末の大學者佐藤信淵もその著「天柱記」に「太古の事實を言繼ぎ、言傳へたること皇國の古説より精しきはなく、又皇國の古説より眞なるはなし」と言つてゐる。

さて、その後成りませる神は、國之常立神から、伊邪那岐、伊邪那美兩神に至る、いはゆる神世七代であるが、これまた何れも生物進化の段階を、そのまゝ、神の御名によつて表現せられてゐると見ることが出来るのである。

即ち、生成進化の順序として、現代の科學は、太陽が出来、諸星と共に地球が出来、地球には生命體の現はれとして、先づ最初には下等動物の發生、背骨動物時代、鳥類の出現、類人猿原人を経て今日の人類に至つてゐることを説くのであるが、神世七代の神々はみなそれ等各時

代を表現せられてゐることは、それ々の御名を當てはめて見ることによつて容易に判明するのである。

故に、古典神代卷は、たとひ、これを科學的に見ても、決して荒唐無稽のものでないことが立證せられるのである。

五、古典は一大政治經典なり

然し、古典は決して單に宇宙進化の順序を顯示するために修録せられたるものでなく、そこには宇宙の眞理より見たる皇孫皇民の偉大なる宇宙觀、人生觀、理想觀が述べられてあるのであるが、古典編述には、凡そ左の三つの大きな政治的目的があつたやうに解せられる。

その一つは神武天皇以來の大和朝廷の由來を説き、もつて我が國體の淵源と、皇統の尊嚴とを知らしめること、その二は兼ねて日本民族の由來を説き聞かせ、三つにはこれ等兩者の關係即ち國體、天皇、臣民の關係を明瞭にするところにあつたものゝ様である。

こゝに於いて、私共は、古典を目して、一つの偉大なる政治經典と見ることが出来るのである。既に古典編述の意圖がこゝにあるとすれば、従つてその中に出てくる多くの説話の中には、史實の含まれてゐるところもあるであらうし、又その反對に、史實が説話體の形をとつて表現せられてゐる箇所もあるに違ひない。更に或ひは、説話の衣装を着せられてゐるものの中には可なり後代的のものもあつたり、又或ひは甚だしく理想化せられた處もあることだらうと察せられる。

この点は古典の神代卷を讀む上に於いて最も重要なことであるから、今一度繰返して云へば我が國體が、神代以來の歴史的事實の上に立つてゐることは、申すまでもないことであるが、さらに、これ等の歴史的事實を檢討して、その間に一定の理法を求むるため、それ／＼の時代の勝れたる人々の直観、體驗、思想等を通じて、或は演繹的に、或は歸納的に、史實と説話とを適當に取捨選擇して、これを理論づけ、體系づけられて出来上つたものが、今日私共の見る古典神代卷の内容である。私は古典をかくの如く解釋することが最も正しいのではないかと思つてゐる。

然も、私共が神代卷を讀んで驚くことは、科學的に云へば、恐らく今日より遙かに、無智蒙昧、野蠻粗野であつたであらうと思はれる古代にあつて、この編述をなした古代人の直観の正鵠透徹さと、世界觀の高邁雄大なることである。そこで讀めば讀むほど、これ等古典が普通なみ／＼の書でないことを感じさせられ、曾つて先覺が、これは單に古典といふべきではなく「神典」であるといはれた意味が判るのである。

實に記紀の内容は、これを一言にして云へば、神々の「神ながらの道」の言行録である。天地宇宙の眞理を説き明かして、神人共に進むべき道を昭々乎として明示したまへる神典である。従つて、それは限られたる時代や、場所にのみ通用する、教祖や學者の唱へる眞理や學説と同日に論ぜらるべきものでなく、實に時間空間を一貫したる不變の眞理——事實が語られてゐるのである。その故に

神の代のことを詳らかに記したる

書をしるべに世を治めまし

と明治天皇が申された如く、歴代の天皇は、これを皇祖皇宗の遺訓として遵守せられ、われ等

皇民はこれを皇國の皇讓とし、大理想、大信念としてあひ勵み、あひ努め遂に今日の偉大なる日本國を形成したのである。

即ち、私共は古典を心讀、體讀、味讀することによつて、はじめて日本の神國たるゆゑんが分りその萬國無比であること、天皇の御本質、臣節道、更に大和民族の世界史的使命を了解することが出来るのである。私が常に日本精神を把握し、日本國民たる信念を得るには古典によつて信念的歴史觀を確認する以外に道なしと斷ずるのは、實にこの故である。

この見地から云つて、從來小、中學校に於ける日本歴史が、神武天皇以後の歴史にのみ重点をおいて、最も肝要な神代史に對してはその説明極めて簡略粗雑にすぎてゐる様に感ぜられることは、誠に遺憾なこと、云はねばならぬ。源平藤橘の争ひや、武門の興亡盛衰の跡を尋ねることもよいが、神代卷を腦裡深く刻み込むことによつて、私共は始めて皇國に生れたる意義と使命とを知ることが出来るのである。私はこの點、切に文部當局をはじめ、世の識者、爲政家の注意を喚起して止まぬ者である。

六、古典の内容

さて、愈々古典の内容について述べることにしやう。

前述した通り、紀記兩典には、それ／＼その内容に於いて特徴があるが、一言にして云へば兩典には、肇國の理想、國體の淵源、天津日嗣の統治、臣節道等、日本國民として知悉しておかねばならぬ重大なる神代ながらの國史が記録せられてゐるのである。

これ等の點を、こゝで詳細に亘つて述べることは不可能のことであるから、茲では古典を通して見たる日本精神の眞髓ともいふべきものを、二三取り上げて、これに説明を加へることに止めたいと思ふ。

而して、その題目として、私は特に左の四項目を選んだ。

イ、生成思想について

ロ、天皇の御本質

ハ、「日本は神國なり」といふ意味

ニ、大和民族の世界史的使命

然も私は一切の日本精神は、完全にこの四項目の中に盛られてあることを確信する。従つ

この思想、信念を把握することは畢竟、日本精神に徹することであることを強く主張するものである。

尙、斷つておきたいことは、私が、こゝに述べることは、頗る粗笨、不徹底ではあるが、それでも讀者諸君がこれを熟讀含味して下さるならば、この短文を通じても、よく日本精神の深奥を直観、悟入、把握せられることが出来ることを信ずる。即ち、それは無學直観である。日本民族特有の悟性である。それには片々たる西洋流の分析的な、部分的な科學的知識や、學問の力は一切必要とはしない。

1、生成思想について

これは前にも引用した、古事記の冒頭の一句に

天地の初發の時、高天原に成りませる神のみ名は天の御中主神……。

とあるが、この天之御中主神とは、この字義が示す通り、宇宙の中心を主宰し給ふ神といふことである。換言すれば、宇宙の大中心、大根元といふことである。而して古典に現はれた古

代思想の根底をなす宇宙觀、人生觀は、この天地宇宙間に存在するありとあらゆるもの、即ち山川草木も、動、植、礦物も、有機體も、無機體も物質界も、精神界も——これ悉く天之御中主神より出でたるものとする思想である。かくの如く宇宙萬物は、何れも天之御中主神といふ元神から出でるのである。神から出たものは又神である。従つて宇宙の萬有は、これ悉くその分靈、分魂、分體神であり、八百萬の神々である。

ところが、宇宙萬有悉くが神であるといふと、一見、外國流の汎神論と變りがない様であるが、實は、そこに根本的な大きな相違があるのである。然も、この神に對する觀念の相違こそ日本思想をして萬邦に卓越する、いはゆる世界無比の思想的根底をなしてゐるものである。

即ち、外國流の汎神論は、宇宙萬有——八百萬の神は、初めから個々別々に獨立した集團として、平面的に、靜態的に、存立するものと解するのであるが、この汎神論の底流をなす思想は存在思想である。而してこの個別的、存在思想を押し進めて行くと個人主義乃至民主主義の思想となるのである。

然るに古代日本人の思想はさうではない。即ち宇宙萬有は、一切同一の根本中心（天之御中

主神)より出でたる分派・若くは末梢であつて、然もこの根本中心と、分派末梢とは、絶へず發顯並びに還元的作用によつて、根本より末梢へ、末梢より根本へと間斷なく交流、活動をいつけ、こゝに天地萬有が生じたと観るのである。故に中心と分派とは、常に一體化、一元化をなし、その關係は、立體的であり、動態的であり、中心即ち全體の形をとると説くのである。この萬有觀を、生成思想、若くは宇宙萬有同根一體の原理といふのであるが、これこそ日本思想の根元をなすもので、この思想は、どこまで押し進めて行つても、絶対に個人主義、對立主義、或は民主主義に墮することはないのである。

即ち、外國思想の根底をなす存在的なる汎神論は、個人主義を生み、階級對立主義を生み、民主、共產主義を生んだのであるが、これに反して、我が國の宇宙萬有同根の生成原理は、全體主義、一體主義、天皇中心主義、世界一家主義思想となつたものである。即ち私共は、彼我の思想の根本にかくの如き決定的なる相違のあることを深く認識せねばならぬ。

古典の中に出て来る「生成化育」とか「修理固成」とかいふことは、この生成思想の何んたるかを了解することによつて始めて判るのである、即ち、發顯還元による間斷なき動的脈絡(

往復)によつて、萬有は生成し、化育發展する。この作用を産靈といふが、この産靈の觀念こそは日本精神の基調をなすものである。天之御中主神の次に成りませる神は高御産靈神と神御産靈神であるが、この兩神こそ、今も尙降時も御活動を止め給はぬ産靈の神であり、この信仰が、日本精神の永遠性、進歩性の根底をなすものである。

ロ、天皇の御本質

既に述べたる如く、宇宙萬有の根本中心は天之御中主神である。ところが皇統連綿たる、天皇の御血統を、そのかみへ、そのかみへと遡つて行くと、神武天皇より更に天照大神につゞき尙もきはめて行くと諸冊兩神より遂に宇宙の根元たる天之御中主神にまで達するのである。そこで三浦梅園は「無始の帝統」と申してゐるが、この事實は古典を讀むと、よく諒解すること出来る。即ち、私共は、この事實を確認することによつて、始めて、天皇の御本質を知ることが出来るのである。

即ち 天皇を天津日嗣と申上げるのは、實にこの故であり、また、天皇を「あらひとかみ」

とも、「あきつみかみ」とも申し上げるのは、かくの如く人にして神であらせられるからである。換言すれば、天皇は天之御中主神の御延長であらせられ、天照大神を始め、歴代の天皇とも御一體であらせられるのである。

かくの如く天皇が天津日嗣として、時間的には萬世一系であらせられ、空間的には全國家、全世界、全人類、全宇宙に普遍する本源にあらせられるとすれば、天皇は最早や日本の天皇のみではあらせられないのである。則ち天皇は日本の天皇であらせられると共に、その御本質は世界の天皇であらせられ、宇宙の天皇であらせられるのである。

この意味を了解することによつて、天皇が諸外國の皇帝や國王や元首と全くその格式、本質を異にし給へる、いはゆる「上御一人」にわたらせ給ふ所以が鮮明せられるのである。即ち、今日諸外國の主權者は、或は徳政をもつて、或は武力、權力、又或は興望といふやうな人爲によつて、其の位にのぼつたものであるが、日本の天皇は、時間、空間を超越して、宇宙自然の大法則に従つて大中心となられ、萬有を統一主宰し給へるのである。

故に天皇より見られれば、世界の人類は素より森羅萬象はことごとく陛下の赤子であり分靈

である。世界の民は何れも「億兆」であり、「おゝみたから」である。その反對に人類乃至萬有より見れば、天皇は宗祖であり、宗家である。従つて兩者の關係は、さきに生成思想で述べた、根本末梢歸一々體と中心分派歸一々體の二大原理によりて支配せられてゐるのである。而してこの原理が萬世一系と、君民一體の二大原則となつて、こゝに天皇政治が発現するのである。従つて天皇の御心境は、いつの場合でも、「一視同仁」「四海同胞」であり、明治天皇の御製「民は我が身の生みし子なれば」である。大自然はたゞ與ふことのみで、一點求むるところがない如く、大自然そのまゝにいます天皇は、萬物を哺育すること、愛撫すること、これを同化し、統一調和せられ給ふことが、御任務であり、かくして萬有を生成化育せられるところに御使命があるのである。

而して、この御任務、御使命を果させ給ふために御活動せられることを皇道といふのである。従つて皇道とは萬有、特に人類を宇宙自然の大道に歸一せしめられることを申すのである。古典には「しらす」とか「安國と平けくしろしめす」とかいふ言葉があるが、これを現代語で云へば「世界の皇化」といふことである。即ち、「しらす」政治とは領有する、私有する政治と

は違つて「知る」政治である。各國民の自性を知り萬物の自性を知つて、世界を修理固成し人類を生成化育、同化統治する政治である。これを實現し給ふことが天業であり聖業である。

ハ、「日本は神國なり」といふ意味

日本人は昔から、我が國は神國であるといふ神國意識を持つてゐるが、それが單に神の護り給ふ國といふやうな觀念論的のものではなく、事實の上に認識をおく様になつたのは、南朝の忠臣として有名な北畠親房の「神皇正統記」が、あづかつて力があるといはれてゐる。即ち親房は同書の冒頭に於いて、次の如く喝破してゐる。

「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみこの事あり。異朝には其の類なし。この故に神國といふなり」と。

これを判り易く書き直して見ると次のやうである。「大日本は神の治め給ふ國である。天之御中主神が始めて國の基を開き給ふてよりこの方、天照大神の御末が代々永久に君臨し給ふのである。かゝる國は獨り我が國のみであつて、外國には類例がない。そこで我が國を神國とい

ふのである」と。

さて、この「神國」といふ言葉であるが、これを近代的の言葉で表現すれば「絶対國家」といふことである。そこで日本は神國なりといふことは、日本は絶対國家であるといふ意味である。従つて諸外國は何れも相對國家であるといふことが出来る。

然らば、絶対國家と相對國家とは、本質に於いてどう違ふかといふと、これは第一に國の中心を異にすること、第二に國家の成立並びに體制を異にしてゐること、この二つである。而して、そこに萬邦無比なる我が國の本義があるのである。

そこで、私はこの二點について根本的に相違せる点を、古典を典據として説明を加へて見たらと思ふ。

(一) 萬世一系の天皇を奉戴せること

我が國は近く皇紀二千六百年を迎へ様としてゐるが、その間、皇統は一筋の繩の如く連続としてつゞいてゐるが、更らにこれを遠く遡れば、實に宇宙創成の始めにまで一貫してゐることは前項に於いて述べた。尤も神武天皇までは御陵の存在、御遺物、文献等によつて實證せられ

るが、それ以前は今日のところ、古典による日本國民の信仰的歴史觀に俟つ外はない。が、これとても今後、精査研究を續けるならば、恐らく明瞭に考證し得られることを確信する。

即ち、最も古くは創國の神謨たる、天之御中主神が、伊邪那岐、伊邪那美兩神に天ノ沼矛を賜ひて「この漂へる國をつくり固め成せ」といふ、いはゆる「修理固成の神勅」を下し給へる事實、下つては伊邪那岐神が我子天照大神に「汝が命は高天原を知らせ」と詔り給ひて、頸珠を授け給ふた「頸珠の神勅」を拜しても、更らに下つて天照大神が、天孫を降臨せしめられるに際し下し給へる「天壤無窮の神勅」たる

「豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、これ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫就いて治らせ、行矣、實祈の隆をまさんこと、天壤と共に窮り無かるべきものぞ」

を拜讀しても、天皇が神代ながら萬世一系の御血統を繼がせ給へる事實を知ることが出来るのである。

そこで帝國憲法第一條に於いては、この事實を條文化して「大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス」と規定し、以て萬古不易の我が國体の根本原則を明示せられたのである。

ところが、諸外國に於ける國家の根本中心はどうかといふと、動搖常なく交代につぐに交代といふ實情である。例へば、支那では「禪讓放伐」とか「易姓革命」とかいつて、有徳の士が帝王に就くことになつてゐるが、若しその帝王の徳足らざれば、位を臣下に讓つたり、臣下にして其の君を弑して位を奪ふことさへ許されてゐるのである。又、西洋諸國では、君主の多くは武力をもつて民を征服した者であるから、それ以上の強者が現はれると、そのたびごとに反對に征服せられて國の中心が代るのである。殊に大統領の國にあつては、主義政策の相違によつて、殆んど選舉毎に中心の更迭を見ることは周知の事實である。かくして一國の中心は常に反覆せられ、交代せられ、革命が繰返へされてゐるのである。即ち等しく國家といつても、彼が我々の中心（主權者）に、かくの如き根本的相違がある。この事實を忘れて、我が國を外國と同様に見やうとするところに、天皇機關説といふが如き異端邪説が生れて來るのである。

(二) 神、定め、神、統治し、給ふ國

日本國の成立順序を、古典によつて見ると次の様である。

宇宙の主宰者の直系たる諸、冊兩神は、先づ國を生み、後に人を生まれ給ふたが、最後に「

吾れ已に大八洲國及び山川草木を生めり、何ぞ天下の主たる者を生まざらんや」と仰せられて天照大神を御生みになつたのである。

又、天孫を降臨せしめられるに際しては、特に「豊葦原瑞穂國」と我が國を指定せられ、皇孫もまた「此地は朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり、故、此地ぞ甚と吉き地」と詔り賜ひて降臨せられたのである。かくの如く、我が國は神典の眞理を地上的に果す上に於いて、最も好適地として神によつて選ばれ、天照大神の御末を永久の中心として與へられたる唯一の國である。

これに對して外國の國家成立の事情を見ると、或る偉人が地球の或る一角から起つて、その地域の人民を統治するといふことによつて、國家が建設せられてゐる。即ち人があつて、それから國が人の手によつてつくりあげられてゐるのである。ところが、我が國のみはそうではなく、人間が地上にその姿を顯はさない以前に、既に國はあつたのである。そしてその國を造られた天つ神が、全世界、全人類、生成化育の御本源としての直系を下し給うたのである。この意味に於いて、日本には肇國はあるが、建國はないとも云へる。

即ち、我が國に於いては國家生活の中心と仰ぎ奉つてゐるのは、征服者や、権力者ではなく宇宙眞理の本體にまします天皇である。従つて國民の國家觀は、天皇即國家、天皇即國民といふ宇宙萬有同根一体、中心分派歸一々体の絶對原理に依つてゐるのである。故に我が國には君臣の別は、自から嚴乎として存するが、然し、それは決して他の國に於いて見るが如き、治者と被治者との對立關係ではなく、實に親子の關係であり、君民一體思想である。即ち、臣民は天皇を「すめらみこと」と崇め奉れば、天皇は臣民を「あめのますひと」「おほみたから」と愛撫し給ふのである。これが絶對國家である我が國と、他の相對國家との本質的相違で、日本が神國といはれる所以は、實にこゝにあるのである。

二、大和民族の世界史的使命

私は以上述べた總結論として、吾々大和民族の世界史的使命について一言觸れて置きたいと思ふ。

私共は祖宗の教へにより、宇宙の主宰者であらせられる天皇を國家の中心に奉戴尊崇する日

本國に生れたことの光榮を感謝すると共に、深くその意義を考へねばならぬ。それは全日本人は、生れ落ちると同時に、天業翼贊の大任務が荷負せられてゐるといふことである。

天業とは、これまで屢々申し述べて来たことによつて明瞭である如く、世界を皇化して、全人類を天皇に歸一し奉ることである。而してこの一大聖業を翼贊するところに、吾等生を日本國に享けたる意義と、大和民族たるの大使命が存するのである。

従つて私共の民族的な仕事は、世界に向つて皇道を思想として宣布するのみならず、これを現實として實踐することである。今日、なほ世界の底流をなす思想は、謬てる存在思想である而してこの思想が、或は個人主義を生み、對立主義となり、或は資本主義を生み、共産主義を生ずることは、前に述べたが、この思想を私共日本民族の宇宙觀である生成思想をもつて撃破粉碎せしめねばならぬ。そこで、私共に與へられたる現實の課題は、吾れ／＼盡くがこの思想戰の熱心なる宣傳者となり、果敢なる行者となることである。

而してこの皇道思想を、あまねく世界に皇化せしむることによつて、始めて皇國の大理想である「八紘一字」の世界觀を完成することが出来るのである。近頃、頻りに八紘一字といふ言

葉が用ゐられてゐるが、この言葉の意味は、八紘とは「八つの隅」といふことで、つまり世界といふこと、一字とは一つの家といふことである。故に八紘一字とは「世界一家」といふことである。即ち萬有同根の原理を忘れて、みだりに國を建て、事を構へて、對立抗争に寧日なき現在の世界情勢を一掃して、恰かも一つ屋根の下にある家族の如く、親和協力の世界を創建しやうといふのが八紘一字の理想といふことで、而してこの大理想こそ陛下の大御心であり、肇國以來の我が國の國是である。即ち、この大理想は、今より二千六百年前、皇祖神武天皇が、御東征の大業を完うせられ、橿原の宮居に於いて皇位に即かせられ給ふた時、發せられた大宣言の中に發見するのである。

「六合を兼ねて以つて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲むこと、亦可からずや」とある御詔勅が、即ちそれである。

これによつても明瞭であるが如く、我が國の理想は、たゞ徒らに他國を吞嚙して、權力を揮ひ、物質的利益を得ようとする様な帝國主義、侵略主義では斷じて無い。全人類の福祉のため地上に恒久的なる平和郷を建設するといふことが、その大目的なのである。

かくして世界一家、大和一体の大理想が實現し、今日私共が天皇を中心として讃仰し奉るが如く、世界の全人類が擧げて天皇を、宇宙の天皇、世界の天皇として尊崇歸一する時、こゝに始めて世界に眞の平和が訪れるのである。

然しながら云ふは易く、行ふは難し、この大理想を具現することは中々容易の業ではない。そこには不測の困難と、相當の長年月を要することが覺悟されねばならぬ。然も尙私共は、敢然と、且つ倦むことなく一大信念をもつて、この聖業遂行のために献身犠牲の誠を致さねばならぬ。

我が國の理想が、既に世界大和にある以上、我が國民が、どここの國民よりも平和の愛好者であるといふことは言を俟たぬ。故に我が國民を以て好戰國民といふが如きは思はざるも甚しい者である。たゞ、然しながら我が國民は怯懦な民族ではない。もとより戰は欲しないが、戰をことさらに避けるものではない。況んや金匱無缺の我が國体を侵さんとし、或は皇道の發揚に對して妨害を加へんとするものあるときは、驟然として起ち、相手方を粉碎せしむれば止まぬものである。

上古に於ける日本の別名の一つに「細才千足國」といふのがあるがこれは精銳なる武力の充實したる國といふ謂である。天つ神が諸冊兩神に國造りを命じ給へるときにも天の沼矛を賜うたのである。天の沼矛はこれを皇軍とも解することが出来る。然も、世界の現状は今日と雖も當時と同様、至るところに「漂へる國」がある。これを天ノ沼矛たる皇軍をもつて固成することは、天つ神の神意であり、天命であること、信ずるのである。

今や我が國は、この聖業を妨害し、世界赤化の手先となつて、皇道に挑戦する暴支を膺懲すべく、皇軍百萬、遠く海を越えて全支に兵を進めてゐる。而して我が將兵は陸、海、空に、曾て、大伴家持が歌つた「海ゆかばみづくかばね、山ゆかば草むすかばね、大君の方にこそ死なめ、かへりみはせじ」の精神を身をもつて實踐しつゝある。私共は戰場にあり、銃後にあるとを問はず、舉國一魂、億兆一心、もつて亞細亞大陸に皇道を宣布せんとする、この千載一遇の聖戰を完ふせしめねばならぬ。而してこれこそが大和民族の世界史的使命を達成するゆえんであり、祖宗の遺訓に應へ奉る道である。

私は最後に明治天皇が明治元年三月十四日、五ヶ條の御誓文と同時に發表せられたる御宸翰

の一節を掲げて、今日更めて相共に大御心を拜誦したいと思ふのである。
 朕茲に百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きにおかん事を欲す。

七、結語——言靈について

——言靈の幸はふ國……言あげせぬ國——

最初に述べた通り、古事記や日本書紀が出来たのは、今から約千二百年前のことである。千二百年前といへば、古いことは古い、しかし、それらの古典の中に記述せられてある事柄は日本書紀にあつては地球の生成から、古事記にあつては、實に宇宙の創成に始まつてゐる。然も我が國上古に於いては文字らしい文字はなかつたから、どうして神代のことなど判るものかと疑ひ、遂にはあたまたまから古典の價值を否定してかゝらうとする者がある。

しかし、文字が無かつたからといふ理由で、果して太古の記述を全部虚構の事實であると云へるかどうか。成る程太古には完全な文字が無かつたかも知れない。が、言葉はあつたであらう。ものいふ術は知つてゐたであらう。既にも、ものいふ術を知り、言葉があつたからには、この言葉を手頼りに、目に見、耳に聞いたことは、これを語りつぎ、言ひ傳へることは出来たであらう。

さて、然らば後世へ残すのには、文章の方が完全か、それとも言葉の方が間違ひはないかといふことが問題となる。これも、もちろん文字による記録の方が正確であることに異論がある筈はない。さればこそ記紀の編纂がなされたのである。が、それかといつてこれにも大いに異論はあることはある。このことについて、本居宣長は「葛花」に詳しく論じてゐるが、やゝ長文であるから全部をこゝに轉載することは出来ぬので、その一節を左に摘録する。

「又言に傳への誤りありといへるは、誠にさることにて、文字は不朽の物なれば、ひとたび記し置きつることは、いく千年を経ても、そのまゝに遺るは文字の徳なり。然れども文字なき世は文字なき世の心なる故に、言傳へとても、文字ある世の言傳へとは、大に異にして、うき

たることさらになし。今の世とても、文字知れる人は、萬の事を、文字に預くる故に、空には
 覺え居らぬ事をも、文字しらぬ人は、返りてよく覺え居るにてさとりべし。」

又曰く「文字なければ文字なきまゝに、言傳へて詳に傳はる事なるを、中々に文字出來ては
 萬の事を書に委る故に、その前のことは消へて傳はらぬなり。然るに皇國には、天地の始めよ
 りして、上古の事共の、正しく詳らに傳はりたるは、もとより大御神の御國の徳にして、文字
 のありなしなどには關からぬ事ながら、如く文字の有無の勝劣にかけていはんには、中々文字
 なかりし故にこそ、詳に正しくは傳り來つるならぬ」

これは誠に味のある言葉である。更らに宣長は

「殊に皇國は、言靈の助くる國、言靈の幸はふ國と、古語にもいひて、實に言語の妙なるこ
 と、萬國にすぐれたるをや」

と言つてゐる。そこで私は本論の結語として「言靈」といふことに就いて卑見を陳べること
 にしやう。

先づ言靈といふ字義を解釋すると、言靈のこととは「事」である。行ふこと、話すこと、見

たこと、聞いたこと等に用ひることである。それは事實であり、眞事（まこと）といふ意味で
 ある。たまとは、たましひのたま、即ち靈であり、魂であり、むすびである。故に眞實がむす
 びとなつて發せられたものが言靈といふことである。

言靈は眞實である。空虚なものではない。従つて瞬間の聲音と同時に消へ失せて仕舞ふ様な
 例へば鐵板を叩く音、木を倒す音響等は言靈ではない。そんな音は刹那に消へる。然し、人間
 の口より發する言葉はその人の思想、精神から發するものであるから、それは赤心の吐露であ
 り、又意志傳承の最高作用である。

眞實をもつた言葉、實行力のある言葉——即ち言靈にして始めて空間的には全世界へ、時間
 的には幾萬年の後世へと傳承し、常に潑刺と活動するのである。

我が國を「言靈の幸ふ國」といふのは、言靈を傳承することにより、神ながらの大道を失ふ
 ことなく、子々孫々に傳へ、國體は明らかに、皇運は彌榮へる國といふ意味である。

又、我が國を「言あげせぬ國」といふのは、言靈を重んずることから自然生じたことで「實
 行の國」「言行一致の國」といふ意味である。言つたことには必ず實行が伴ひ、行はぬことは

口を緘して云はぬといふのが我が國風である。故に滔々千萬言を費しながら、その一つをも實行しなかつたり、虚言、巧言を弄して恬として耻じざるが如きは、何れも外來思想に感染したものである。古人が死を堵して「然諾」を重んじたり、「武士に二言は御座らぬ」と言ひ放つたりすることは、これこそ言行一如の皇國理想を表現したるものに外ならない。

かくの如く言靈は、飽くまでも精神の發露であり、結晶である。これは皇國の言葉の特異性であるが、その特徴の一つとして敬稱の数が極めて多いことを擧げることが出来る。而してこれは言靈が、神ながらの敬神崇祖の思想と同様に發達したことを物語る生きた證據であるとも云へる。

又、神代にありては言靈の傳承は和歌の形式によつてなされた。今日でも、和歌のことを「敷島の道」といふが、これは「しきしまの道」といふことが、直ちにそのまゝ「神ながらの道」に通じてゐたからである。即ち、三十一文字といふ短かい言靈の中に千萬言を要する深遠なる皇國の理想を詠じ、これを永久生命として萬世にまで残さうとしたのである。

又、古代人が、この言靈を如何に大切に於て來たかといふことは、特に語部といふ官職を置

き、この人達が語り傳へて史實を保存し、神事の際には神前に於いて史實を奏することをもつて、神前の年中行事としてゐた事實に徴しても明らかである。即ち、言靈が歴史である以上、たとひ古代に文字が無くとも、また古典が餘程後代に出來上つたものであるとしても、その神典たる價値に於いては何等缺くるものがあるとも思はれない。否、言靈の眞義を知ることによつて、私共は神典のいよゝ神典たるゆゑんを會得することが出来るのである。

古 典 觀

古典より歌たる日本精神

定價 三十錢
送料 三錢

著者兼
發行人

久 留 弘 三

發行所

東京市麹町區永田町一ノ三二
日本革新黨本部
東京市芝區田村町五ノ十三

印刷所

兼 平 印 刷 所

昭和十三年九月十日印刷納本
昭和十三年九月十五日發行

終

